

シリーズ 1
同時代紀行



齊藤明美

Akemi Saito

韓国翰林大学助教授

韓国へ ごく普通の、韓国入門 日本語教師として



乃木坂出版



韓国へ 日本語教師として

●ごく普通の韓国入門

Akemi Saito

齊藤明美

日本語教師として韓国へ

1995年2月1日 第一版第一刷発行

著者 齊藤明美

発行者 檜崎知行

印刷・製本所 凸版印刷

発売所 星雲社

〒112 東京都小石川 5-19-25
03(3947)1021

発行所 乃木坂出版

〒107 東京都港区赤坂 9-6-28
アルベルゴ乃木坂9階
03(3423)6762

著者略歴・齊藤明美(さいとう あけみ)

1981年 駒澤大学大学院人文科学研究科

国文学専攻博士課程修了

文理高等学校教諭・文理情報短期大学講師を経て、

現在、韓国・翰林大学日本科助教授

まえがき

韓国の大学に赴任してから、三年が過ぎようとしている。今でも、あのハングル文字をたくみに操る若い学生たちと、同じ時間を共有していることに不思議を感じる一瞬がある。

韓国の大学で教えるために、夫と娘を日本に残して単身赴任するという、今にして思えばずいぶん大胆な決断をし、韓国語が一言も分からないまま海を渡った自分の行動は、無謀としか言いようがないものであったかもしれない。

しかし、そんな無鉄砲な私を翰林大学はりんの学生たちは、あたたかく、そしてやさしく迎え入れてくれた。ともに学び、語り、旅をする仲間として、日本語学習を通して日本という隣国を理解し、今後のよりよい関係作りをめざそうとしている学生たちを見ると、日本と韓国のちよつと明るい未来が見えてくるような気がする。

もちろん、私が安心して働ける環境作りをしてくださったのは、日本語を自由に話される世代の先生方であつた。

「困ったことがあつたら、なんでも言ってください。全力で守ってあげますから」

何人もの先生方が、皇太子が雅子様にしたプロポーズの内容と同じような、やさしい言葉をかけてくださった。今も韓国の大学で教えていられるのは、こうした思いやりあふれる先生方のおかげであると、心から感謝している。

このエッセイは、家族の全面的な協力を得たといっても、なんとも身勝手に海外へ単身赴任をした主婦が、ハングル文字が踊っている韓国社会でどうやって生活し、韓国人学生とどのように触れ合ってきたかという記録でもある。

まさに四十の手習いで始めた新しい言葉、新しい生活環境への主婦の挑戦である。

海外で日本語を教えてみたいと考えている若い方々にもぜひ一読していただきたい。

なお、出版に際して、翰林大学の諸先生方、久ヶ沢かず枝氏、乃木坂出版の檜崎知行氏、中里幹子氏に大変お世話になりました。心より感謝いたします。

1994年12月

月見野にて

齊藤 さいとう

明美 あけみ

目次

第1章

私が夫と娘をおいて単身赴任した理由

——初めての国、韓国で待っていた人々

9

夫と娘が喜んでくれるのは「悪妻」の証拠？ 13

夢に出てきたタイの少女が励ましてくれた 18

せっかく覚えた韓国語が役に立たない！ 21

ドライブ・インで出会った最初のカルチャーショック 25

みんなが日本語を話すなんて、ここは本当に韓国？ 29

「ここは日本人にとってはキツイ国ですよ」 31

「先生方は「犠牲の世代」ですから」 33

第2章

習うより慣れろ！ の韓国暮らし

——市場のおばさんたちに励まされて

39

生徒はみんな「金さん」ばかり？ 42

第3章

優しい先生方にもある悲しい過去

—— 60歳以上の人は、すべて日本の支配を経験

「日本の女子学生とペンパルになりたい」 48

思いがけない後日談で分かった韓国人気質 50

オンドルつきの3LDKが私の宿舎 52

市場のアジュンマーが、私の韓国語の先生 55

朴おばさんと友だちになって韓国暮らしに自信が… 58

「オンマー」と母親を呼ぶ声に日本の娘を思い出す 68

教務所(処)長に連れて行ってもらったビザ書き換え 74

知っているはずなのに、日本語を話さないおじいさん 77

日本学科の学科長、金先生の東京時代 81

日本の教科書には載っていない「朝鮮出兵」の真実 85

普段穏和な李教授が、少し興奮して話されたこと 87

敵を知るために日本語を学ぶ人たち 91

朝鮮戦争が生んだ悲劇と日本人は 93

第4章

ここが違う！ 韓国の学生たち

——日本学科の学生はいきいき、ハツラツ！

日本語会話の授業は大入り満員 103

後期になって男子学生が激減した理由 106

軍隊に行く子を見送る私の切ない胸の内…… 108

40歳過ぎの出産もなんのその！ 韓国の母はパワフル 112

日本の唄が自由に歌える日がくればいい 115

ついに突きつけられた、あの質問 121

翰林大学学生のアルバイト事情 129

出席した、しないで、女子学生が出席係と大ゲンカ 133

3当4落、韓国受験生のお弁当はふたつ！ 140

成績不振での退学処分に、断食ストで抗議！ 146

学生たちと壬辰倭乱の史跡を探訪 147

第5章

焼肉だけではない、おいしい国 韓国

——嬉しかった出会い、緊張した一瞬

犬の肉を食べたいという私にクスクス笑い
ついに食べたぞ！ 犬の肉の味は…… 159

食いしん坊ガイド①……キムチたくさんの韓式定食 164

食いしん坊ガイド②……私の好きな焼肉 165

食いしん坊ガイド③……辛い伝統料理 167

食いしん坊ガイド④……日本よりおいしい海苔 169

食いしん坊ガイド⑤……種類が豊富なお茶 171

食いしん坊ガイド⑥……締めはこれ！ キムチ 172

山全体が、一家の墓。韓国の「先山」 177

日本人を「装う」スナックのママの秘密は…… 181

子連れでは暮らしにくい韓国 184

日本帰りは金持ちと思われる…… 185

国民全体が家庭的だと、嫁姑関係も…… 190

タクシードライバーも言葉を教えてくれる 193

終章 新しい日韓関係を求めて

——もっとおたがいに、理解しあうために

私の膝に手を置き「ハウマツチ」 196

当然のごとく6倍の料金を請求するタクシー 199

「韓国人なら、外国人にたくさん払わせろよ」 202

深夜、山あいの道を時速100キロで…… 204

「日本人はキライだ！」 208

あー、飛行機に間に合わない！ 213

旅は道連れ、飛行機の中の珍客たち 218

大卒初任給の2倍もかかる日本留学 226

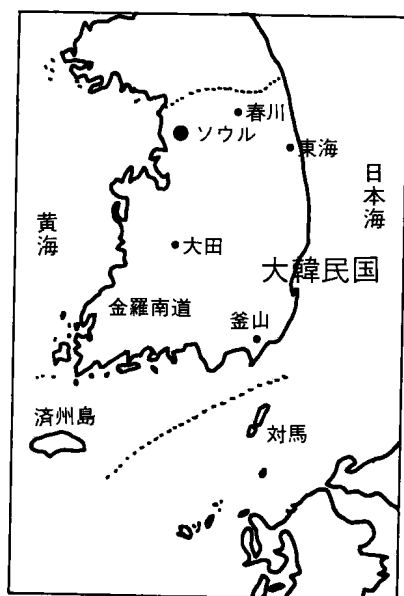
日本人とは友だちになりにくい 227

自分の国を愛していますか？ 231

アジアの若者は燃えている 233

韓国語は日本人にとって取りつきやすい言葉 235

日本の大学で楽に韓国語が学べるように 237



第1章

私が夫と娘をおいて単身赴任した理由

——初めての国、韓国で待っていた人々

忘れかけていた1通の手紙

1992年3月31日。やっと夜が明けようとしている午前5時半、私は西武新宿線の入曽駅いりそのプラットホームで電車を待っていた。韓国・春川市チュンチュンにある翰林大学へと出発するためである。

その年から、私はこの大学に新設された日本学科のネイティブ・スピーカーの、日本語の教師として赴任することになった。今回は、それに先だって、大学の下見と契約をかねた旅である。

韓国では、日本でいう総合大学を大学校、学部と単科大学を大学という言い方をするので、翰林大学日本学科は、正式な呼び方で書けば、『翰林大学校人文大学日本学科』となる。聞くとこれによると、この大学で日本人が日本語を教えるのは、私が初めてのこと。

韓国の大学教員になろうとするのに、私は韓国に対してきちんとした知識を持っていたわけではなかった。いや正確にいうと、なにも知らなかった。韓国語も韓国の生活もまったく初めて。

「こんな状態で、うまくやっていけるんだらうか」

まだ見ぬ大学、韓国という国で生活する不安……。それでもなぜかワクワクする心をスーッとケースのすみに詰めこんで、私は、桜のつぼみがほころびはじめた西武線の駅から電車に乗りこんだ。

夫と中学生の娘をおいて単身赴任

話は約4週間前、1992年3月2日に戻る。

この日は、私が長年、国語を教えていた高校の卒業式。巣立っていく生徒たちを見送ったあと、前日にわが家のポストに入っていた『不在配達通知書』を持って、郵便局に向かった。窓口で私が

手にしたのは、1通のエアメールである。

前年の暮れに、履歴書、論文や著書などを翰林大学に送っておいたから、大学から採用かどうかの返事が来たに違いない……。

合格か不合格か？　まるで入試結果を知らされる受験生のような気分である。とても家に帰りつくまで待ちきれない。封を切る手ももどかしく、その場でひっそくように手紙を開けた。そんな私を見たまわりにいた人は、よほど大事な手紙だと思ったことだろう。海外に住んでいる恋人からのラブレター？　いや、私にとってはそれ以上に（あいにく、海外に恋人がいるわけではないが……）重要な手紙だった。

予想していたとおり、手紙は、3月2日に新設・開講された日本学科の学科長、金先生^{キム}からのものだった。教授会の審査結果は「助教授として採用することに内定」。いわゆる「サクラ咲く」だったのだ。

その通知に添えられた手紙には、私の赴任する春川市が江原道^{カンオン}の道都で山と湖に囲まれた観光名所であること、住まいは大学で用意してくれることなどが付記されてあった。さらに、

「一日も早く韓国に来て欲しい」

という温かい言葉で結ばれていた。

この手紙を、今度はゆつくりと封筒に収めた。そのとき私の心を占めたのは、「ヤッタ」

という目の前がパーツと明るくなるような喜びだった。

採用されたということは、自分がこれまでにとめてきた論文、著書、教師としての実績を評価してもらえたということである。

その知らせを受けたのが、私の勤めていた高校の卒業式の日だったから、なおさら「いままで、よくがんばりました」という証書をもらったようで、感慨もひとしおだった。

最初の感激が静まると、私は、採用通知書をにぎりしめたまま、まだ行ったことのない土地、会ったこともない学生の顔を漠然と想像しながら、そこで教壇に立つ自分の姿を思い浮かべてみた。といつても、土地柄も学生たちの様子も分からないから、どうもピンとこない。

ただ、自分の前に新しい世界が開けたという事実が、実感となって胸にふつふつと湧いてくる。それは、期待という言葉に置き換えてもいいだろう。

「とにかく、1日も早く韓国へ行つて、授業をしてみたい」

とはいえ、隣の国といつても何も知らない土地、知らない言葉、初めての海外での暮らし……。そこまで、勝手に胸を躍らせておいて、ふと現実に戻った。私には、夫と娘がいるのだ。どう考えたって、日本で仕事を持つてゐる夫は、一緒に行くわけにはいかない。ひとり娘はどうしよう。まだ中学1年生だし……。私と一緒に韓国に留学するだろうか？　そういうわけにもいかないだろう……。となると、単身赴任か。履歴書を出したときには、どうにかなるさと、樂觀的に考えていたが、いざ、現実になると……。

夫と娘が喜んでくれるのは『悪妻』の証拠？

単純に喜んでばかりはいられない。複雑な心境を抱えて家に帰った私は、なにはともあれ、夫と娘に採用内定したことを報告した。

「よかった。ほんとによかった」

主人は手放しで喜んでくれた。もともと、私がやりたいと思うことは勝手にさせるタイプの人だった。これまでも、いろいろ無理を聞いてもらっている。しかし、ここまで手放しに祝福されると、それはそれで何ともいえない心境だ。

「こ、この喜びようは、どう解釈すればいいわけ？」
という感じである。

私は、ちよつと混乱して、ヘンな質問をしてしまった。

「私、ホントに韓国に行くの？」

「とにかく、早いうちに一度行つたほうがいいね。どんなところか、分からないだろうから。とりあえず行つてみたほうがいい」

夫は、ニコニコと笑いながら言い切った。

「これじゃ、まるでひとりになるのを、楽しみにしているみたいではないか」

うーん、日ごろの悪妻ぶりが、こんなところで成果が出るとは……。引きとめられるよりはいいけれど、単純に喜んでばかりもいられない気もする。私がいまいちがいのかしら？

次の難関は娘である。反対するかもしれないと心配していた中学生の娘に、恐る恐る切り出した。

「外国の大学からお招きがあるなんてスゴイじゃん。絶対行ったほうがいいよ」

と言う。これまた二つ返事なのだ。こちらも、反対されたらされたで困るくせに、あんまりあつさり賛成されると拍子抜けしてしまう。

なおも未練たらしく、

「ママ、韓国に行つてもいいの？ 寂しくないの？」

と聞いてみる。

「ぜんぜん！」

と、あっけらかんとしているのだ。寂しいどころか、口うるさい母親がいなくて大助かりだ、なんて軽口をたたいてみせたりもする。

私って、娘にも必要とされていないのかしら？ これって、100パーセント本音？ そんなに悪ママ？ 母親として少し寂しくなる。しかし、そこでくじけないのが私のいいところ（？）。

気丈に笑顔を見せる娘の表情からは、これから外国に羽ばたこうとする母親に対する、精いっぱい

の思いやりが見える（と思いたい）。

「いないほうが、うるさくなくていい」
などというのは、13歳の娘なりの愛情表現なのだ（たぶん）。そう思うと、ありがたさといじらしさで胸がいっぱいになる。

「夫も娘も、私の生き方を尊重してくれようとしているんだ」

もしかしたら、都合のいい思いこみかもしれないけれど、なかば勝手にそう思いこむことにした。